



環境美化教育最優秀校のその後の活動報告

2020. 3

公益社団法人 食品容器環境美化協会

もくじ

- はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 福岡県久留米市立大橋小学校・・・・ 2
- 山形県酒田市立浜中小学校・・・・ 6
- 栃木県真岡市立中村中学校・・・・ 10
- 埼玉県戸田市立笹目中学校・・・・ 14
- 兵庫県尼崎市立成良中学校・・・・ 18
- おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

環境美化教育優良校等表彰 最優秀賞受賞校のその後の取組紹介

はじめに

道沿いのポイ捨てごみを自主的に回収する児童。住民と連携したクリーン作戦を企画して主体的に取り組む生徒の姿。漂着ごみを毎年調査分析し、啓発に努める子どもたち。空き缶やペットボトルなどのリサイクル運動を代々継承している学校一。

こうした地域の環境美化に大きく寄与している全国の小中学校を毎年表彰しているのが、「環境美化教育優良校等表彰事業」です。**飲料6団体**(*1)で構成する公益社団法人食品容器環境美化協会(会長 柴田 暢雄)が主催する年1回の表彰事業で2000年に開始し、2019年で20回を数えました。

このたび当協会では、**過去に受賞した最優秀校**(*2)に再びスポットを当て、現在も活発な環境美化活動を実践している児童や生徒、その様子を見守りながら学校をサポートしている地域住民の取り組みを紹介し、広く情報発信する運びとなりました。

ここに登場する5校は、受賞をきっかけに、活動がさらに深化し、地域を巻き込んでいたり、受賞当時に比べて児童数は半減したものの、住民の協力を得て活動継続していたりと、いずれもそれぞれの地域の特性や学校環境に即しながら、意欲的に取り組んでいます。最大の特徴は、環境美化にとどまらず、地域活性化へと活動視野を広げている点です。

その様子が多面的に伝わるように、現役の児童生徒や環境担当教諭の他に、受賞当時をよく知る地域住民、卒業生にもインタビューし、振り返りながら活動意義などについて語ってもらいました。

全国の学校活動のモデルとなり得る優れた取り組みですので、ぜひご一読いただきますようお願い申し上げますとともに、本ページがみなさまの環境美化の啓発・推進の一助になれば幸いです。

*1 飲料6団体

- ・一般社団法人全国清涼飲料連合会
- ・一般社団法人全国トマト連合会
- ・一般社団法人日本果汁協会
- ・日本コーヒー飲料協会
- ・コカ・コーラ協会
- ・ビール酒造組合

*2 2000年～2019年に受賞した最優秀校数と内訳

- ・小学校・・・68校
- ・中学校・・・51校
- ・小・中学校・・・5校
- ・計・・・124校

第1回（2000年度） リサイクル活動部門 最優秀校 協会会長賞

福岡県久留米市立大橋小学校



受賞時（2000年度）の活動概要

社会的な課題であるリサイクルやごみ問題に着目し、自分たちが住む学校や地域を自らの手できれいにして、自然や資源を大切にしようと1998年から開始したのが、「リサイクルタイム」。毎週1回、4～6年生が中心となって回収したごみ分別を徹底して行い、リサイクルの知識を磨いている。もうひとつの活動「クリーンタイム」は、近隣にある大橋歴史公園などの清掃活動で、1～3年生が担当する。さらに、集団下校時に通学路のポイ捨てごみを回収する「大橋クリーン作戦」は全校で実施。いずれの活動においても、回収後は、児童も教諭も一丸となって18種類にごみ分別している。これらの活動が定着したことで環境意識が高まり、校区内を流れる巨瀬（こせ）川の清掃ボランティアに参加し、地域住民と交流を深める取り組みに発展した。



受賞から19年後



2019年現在の活動状況

活発な地域コミュニティが児童の環境美化意識を育む

1 活動の広がり

20年以上にわたり続く美化活動は、学校を取り巻く環境とともに変化しながらも、習慣化された行事として定着している。昨年は、改めて自分たちが住む大橋町の散乱ごみを調査するために、全校を挙げて巨瀬川周辺の清掃活動を実施した(①)。その結果、ペットボトルや空き缶、たばこの吸い殻などの散乱ごみが予想以上に多かったため、毎週木曜、全校を挙げて「ピカピカ運動」を実践中だ(②)。校区を美しくしたいという思いのもと、児童が自主的に登校時に通学路などに散乱しているごみを回収する取り組みで、持ち寄ったごみは回収ボックスに分別する。近隣の大橋歴史公園の清掃活動「クリーンタイム」は毎週月曜、学年ごとに輪番で行いながら、地域を大切にする心や環境意識を育てている(③)。



2 環境の変化

かつての巨瀬川は、生活ごみなど不法投棄が目立ち汚れていたが、学校と地域が協力して実施する清掃活動が奏功し、徐々にきれいになっている。児童が毎週行うピカピカ運動やクリーンタイムにより、校区内のポイ捨てごみは減少。整理整頓された校内では、花を育てる「一人1プランター」活動も盛んで、縦割り班で季節の花々を育てている(④)。



3 住民との関わり

地域とのつながりが深く、夏祭りや運動会、文化祭など住民と協力しながら行う年中行事が盛んだ。児童を見守ろうという気持ちが地域全体に培われており、児童の登下校の時間帯は、住民による見守り隊が活躍。そうした地域コミュニティがベースとなり、児童は美化活動に励みながら、愛着心を養っている。



4 これから

地域住民の指導のもと、現在、校区内にある「香気圧広場」において、植樹にも挑戦中だ(⑤)。ギンバイカなど香る樹木を育てて地域活性化を目指す試みで、その一助となる児童たちの活躍が期待される。



環境美化活動に関わる人たちの声

2009年度卒業生 重富 積香さん

西南女学院大学 保健福祉学部 福祉学科4年



週に1回行う、朝の時間の近隣清掃が楽しみでした。特に、学校の隣にある大橋歴史公園は、自分たちが遊ぶ場所でもあったので一生懸命にごみ拾いを覚えています。その公園にある桜やつつじが大きく成長したこと、そして今も同じ美化活動が続いていることに驚きました。やればやるほど自分にかえてきて、自信につながる取り組みです。これからも自然豊かなふるさとを大切にしていってほしいです。



学校に隣接する大橋歴史公園は、行事の会場にも使われる地域の憩いの場。全校児童で朝の時間に清掃活動を行う。「緑豊かで美しい環境だと感じるのは、ポイ捨てごみがなからこそ」と思いを新たに語る重富さん。

地域住民 秋永 幸さん

大橋校区 まちづくり委員会 会長



子どもたちが活発に行う地域の清掃活動や、元気いっぱいのおいさつ運動は、住民に好影響を与えています。受賞当時に比べて、全校児童数は半分近く減少しましたが、その分、子どもと住民の関係が近くなり、子どもの見守り活動などを通して、私たちが学校に協力していこうという姿勢が培われました。こうした関係が続けば、高齢者の見守りにもつながっていくのではないかと感じています。



地域全体が小学校を大事にしようという気持ちが高く、住民たちは協力を惜しまない。ひとり暮らしの高齢者が増える中、「行事を通じ、子どもとの触れ合いを楽しみにしている人も多い」と語る秋永さん。

在校生 6年 古川 舞那さん
環境栽培委員長



6年になって環境栽培委員を始めましたが、私たちが住む大橋町がきれいになり、地域の人たちが喜んでくれることが何よりもうれしいです。時には、汚れたごみに苦労したり、分別が大変だったりすることもあります。ごみひとつない、みんなが気持ちよく住める美しいふるさとになってほしいという思いで取り組んでいます。

環境担当教諭 炭吉 里保さん



児童の美化意識は高く、言われなくても軍手やビニール袋を持参し、散乱ごみを回収する姿勢が身についています。先日の社会科のフィールドワークでは、町歩きの最中に見つけたポイ捨てごみを、当たり前のように回収していました。地域の方から感謝の言葉をかけてもらえるので、とても励みになり自信にも結びついているようです。

学校長 谷口 健二さん



しっかりした基盤を持つ地域コミュニティの中で育った児童は、環境意識が浸透しています。地域を大切にしよう、環境を守ろう、と改めて言葉かけしなくても、児童は自発的に美化活動に励み、地域のために取り組もうという素地ができているのを日々実感しています。



福岡県久留米市立大橋小学校

住所：福岡県久留米市大橋町合楽1081

電話：0942-47-0069

全校児童数：80名

アクセス：西鉄久留米駅からバスで約20分

第5回（2004年度） 散乱防止活動部門 最優秀校 文部科学大臣奨励賞

山形県酒田市立浜中小学校



受賞時（2004年度）の活動概要

日本海に沿って白浜が続く庄内浜。その近くに位置する同校では、庄内支庁や酒田海上保安部と連携した浜中海岸漂着物調査を1999年から開始。「しおかぜ学習」と名付けて、主に4年生が総合的な学習の時間を使って、地域環境について学習している。海岸に広く点在する埋没・漂着物は、ペットボトルやビニール袋などに細かく回収分別し、過去と比較しながら調査を進めているのが大きな特徴だ。ごみの多さに憂慮した児童は、看板を設置してポイ捨て防止を呼びかけたり、地域行事等で調査結果を発表したりして地域へ広く訴えている。もともと美化意識が高く、1965年から全校児童による海岸清掃活動を継続して実施。通学路クリーン作戦や親子資源回収にも取り組む。その様子に触発された住民たちの参加も年々増加し、地域ぐるみで環境問題に立ち向かう姿勢が整っている。



受賞から15年後



2019年現在の活動状況

地域の中で輝き、つながる大切さが継承される美化活動

1 活動の広がり

4年生が中心となって取り組む「浜中海岸漂着物調査」は現在も継続して行われており、海上保安庁や庄内総合支庁の協力のもと、より地域に根差した環境学習を展開している(①)。さらに、全校児童による庄内浜クリーンアップ作戦は、開始当初よりも認知度が高まり、地域住民や団体、地元企業など徐々に参加人数が増加(②)。砂浜がきれいになることで美化意識が磨かれるだけでなく、他の人のために働くことの大切さや、住民との触れ合いなどを通して地域の良さが実感でき、ふるさとへの愛着が芽生える行事に発展している。長年続いている年3回のPTA主催で行う資源回収にも、児童は積極的に参加して親子で分別意識を養っている(③)。



2 環境の変化

海岸では、児童が地道に美化活動を行っていることが周知啓発につながり、昔に比べてポイ捨てごみは減少しているものの、海外の飲料容器などの漂着ごみが目立つようになった。町においては、主に1、2年生が、お世話になっている施設に感謝の意を込めて季節の花々を植えて交流を図るなど、地域に彩りと活気をもたらしている(④)。



3 住民との関わり

昔、この地域は砂嵐に悩まされてきたが、みんなで力を合わせて黒松を植林し、暮らしを豊かにしてきた歴史がある。そうした地域一丸となって取り組む姿勢が培われてきた住民と関わりを持つことで、児童はその意思をしっかり受け継ぎながら、指示されなくても人や環境のことを考えて行動に移している。

4 これから

「裸足で歩ける安全な海水浴場にしたい」「夕日が真正面に見える浜中の海が大好きです。これからも大切にきれいにしたい」「浜中の海ごみを全部拾ってきれいにしたい」……。庄内浜クリーンアップ作戦を行う際の、児童の力強い意気込みだ。願いが叶う日まで児童の奮闘は続く(⑤)。



環境美化活動に関わる人たちの声

2004年度卒業生

川村 真里さん（看護師） 秋山 貴雄さん（農家）



秋山「受賞時は6年生でした。15年も前ですが、海岸清掃を行い、ごみが多い場所にポイ捨てしないよう啓発看板を設置したのを覚えています。看板設置前と設置後で、ごみの量がどう変化したのかを調査して、地域行事で発表するなど、環境をよくするために懸命に取り組んでいました」

川村「学校から清掃する海岸までは結構距離があり、帰り道は、暑しい疲れているし、辛かった記憶が。思えば、今と違って、あの頃は熱中症対策もなく、帽子をかぶらずに黙々と清掃活動をしていましたね。当時が懐かしいです」

秋山「サボる子もいなくて、みんなひたすら真面目に取り組んでいました。あの頃はピュアだったからなあ（笑）」

川村「海岸エリアに住んでいなければ、実際に海ごみがどれだけあるのかわからないし、なかなか関心が湧かないと思うので、現地に行って自分の目で確かめて美化活動の体験をすることがとても大事だと、改めて実感しています」

秋山「後輩たちにはこれからも海岸清掃活動を続けていてほしいですね」

川村「ポイ捨てしない大人が増えるように美化活動に取り組んでください」

地域住民

小林 正廣さん 高山 龍太郎さん



小林 正廣さん（浜中コミセン副会長 衛生組合長）

高山 龍太郎さん（浜中自治会長・写真右）

高山「子どもたちが海岸清掃を始めた昭和40年代は、ごみステーションがあつてないようなものだったから、あちこちにごみが捨てられている状況でした。そうした環境下、子どもたちの積極的な美化活動のお蔭で徐々に改善されてきました」

小林「今年の庄内浜クリーンアップ作戦は、200名以上参加しました。この辺りは、浜中の特産物であるメロン農家が多く、ちょうど収穫最盛期と重なって、美化活動に参加できない住民がいたのが残念です」

高山「最近気になっているのは、食べ終わった後の弁当容器や缶、ペットボトルなどが入ったコンビニの袋がそのまま捨てられていることです。自動販売機の周囲にも、飲料容器が散乱しています。大人がぼんぼん捨てていくごみを、小学生が懸命に回収するという現状があります」

小林「子どもたちが家に帰って、家族にごみの話をしてもらいたいですね。ごみの問題は、一人ひとりのモラルの問題でもあります。児童の美化活動は、貴重な抑止力になっているので、今後も継続実施してほしいです」

在校生 6年 梅木 蒼波さん

プロジェクト委員長



海岸清掃をする前は、海外から漂着してきたごみがいっぱい落ちていますが、それを僕たちが拾うことできれいな砂浜になるのがとてもうれしいです。でも、手が届かない海岸の奥には、拾いきれないごみも残っているので残念な気持ちにもなります。これからもごみがない町を目指して、今よりもっときれいな海岸にしていきたいです。

環境担当教諭 小野 恵美さん



『ぴかぴかの海だと遊びに来てくれる人が多くなって海がよこぶと思います』—このコメントは、美化活動に取り組む児童の声です。ごみを拾う習慣が身に付き、自分たちの海をきれいにしたという達成感や、ありがとうと言われることの大切さ、ふるさとへの愛着心、そして、地域と触れ合い人とつながる良さを児童は感じ取っています。

学校長 出嶋 幸さん



浜中小の自慢は二つあり、ひとつは、住民が児童を見守ってくれて、地域の中で輝いている学校であること。もうひとつは、上級生が下級生の面倒見が良いこと。縦割り班以外でも、休み時間などに、上級生が先生代わりとなって下級生に遊びのルールを教えている姿が見られます。つながる大切さが伝統として継承されています。



山形県酒田市立浜中小学校

住所：山形県酒田市浜中宇上村370-2

電話：0234-92-2011

全校児童数：61名

アクセス：庄内空港からクルマで約5分

第8回（2007年度） 散乱防止活動部門 最優秀校 協会会長賞

栃木県真岡市立中村中学校



受賞時（2007年度）の活動概要

同校には、1972年から連綿と受け継がれている伝統行事「クリーン修学旅行」がある。当初は、見学先の比叡山延暦寺などで、手縫い雑巾などを寄付したり、境内の清掃を行ったりしていたが、徐々に活動規模が広がり、神社・仏閣や公園などの観光地、宿泊旅館、バス会社などでも美化活動を実施するようになった。この取り組みは、生徒会を中心に企画・運営されている。自主的な奉仕活動として、生徒の環境意識が年々向上し、校区内の通学路や施設などの清掃活動へと発展。また、生徒会の環境委員会が、アルミ缶のリサイクル活動を開始した。収益金で車イスの寄贈を行うなど、社会貢献につながるボランティア精神が根付いている。そうした生徒の姿に触発された住民も、学校にアルミ缶を持ち寄るなど、協力を惜しまない。



受賞から12年後



2019年現在の活動状況

心整え無言で取り組む美化活動が自信と誇りをもたらす

1 活動の広がり

心を整え、自主的に考えて無言で取り組む「一隅（いちぐう）清掃」は、自らを向上させるための実践活動の時間と位置づけ、全校で実施している（①）。その一隅清掃の集大成となるのが、3年生で行うクリーン修学旅行だ。見学先である比叡山延暦寺の国宝、根本中堂において、持参した手縫いの雑巾で同校の生徒が一心に掃除をするという貴重な体験は、約50年にわたり代々受け継がれている（②）。全学年が協力しあって作成した手縫い雑巾約400枚（③）は、修学旅行でお世話になる旅行会社、バスやタクシー会社、見学施設、宿泊先などへ寄贈（④）。こうした一連の美化活動は生徒に誇りと自信をもたらし、進んで取り組もうとする意識向上へ発展している。

2 環境の変化

時代に即したスタイルで現在も継続的に行っているアルミ缶回収活動（⑤）。3年前からは、地域住民がいつでも持ち込めるように、学校前に回収ボックスを設置したところ、目に見えて回収率がアップした。その地域回収分と生徒が持ち寄る学校回収分に分けながら、環境委員会がアルミ缶の数を集計している。以前は空き缶のポイ捨てごみがあったが、ボックス設置後はポイ捨てがなくなるなど、地域全体の環境意識も高まっている。

3 住民との関わり

学校と地域との距離が近く、クリーン修学旅行が代々受け継がれていることや、手縫い雑巾を全校生徒が作成し見学先へ寄贈していることなどを、住民は詳細に把握しており、そんな生徒を誇りに思っている。道ばたでは、元気よくあいさつする生徒とすれ違った住民が、感動して生徒を誉めるといったつながりの連鎖が生まれている。

4 これから

お世話になっている住民への恩返しの意味を込めて、今後は、アルミ缶回収の収益金で地域へ還元できることを計画している。また、樹木が多い環境を生かした美化活動にも注力する。



環境美化活動に関わる人たちの声

2012年度卒業生 田上 知佳さん
白鷗大学 教育学部 児童教育専攻4年



いろんな美化活動を行った中でも印象に残っているのが、クリーン修学旅行です。訪問先の比叡山延暦寺では、最初にお寺の方の話を伺った後、それぞれ廊下や庭など分担を決めて清掃しましたが、国宝の雰囲気によって圧倒されて、終始緊張しっぱなしでした。大学生になった今、中学時代の思い出といえば、真っ先にこの体験を話すのですが、国宝に触れながら歴史を守るといふ貴重な活動は、自分の自信にもつながったと実感しています。今年の5月に中村中で教育実習を行いました。生徒が一隅清掃を行っていたり、手縫いで雑巾を作ったりする姿を拝見し、変わることなく伝統が続いていることを嬉しく思いました。

地域住民 篠崎 正一さん
中村地区区長会長



中村中の生徒が雑巾を手縫いしていることは住民の誰もが知っていて、よく話題に上ります。50年近く続くクリーン修学旅行は、それを根気よく支えてきた先生方の指導の賜だと思います。アルミ缶回収活動は、学校がボックスを設けてくれたことで、365日いつでも持ち寄ることができるようになったのでありがたいです。生徒は、あいさつだけでなく、自転車のマナーも良く、誰も見ていなくても交差点では必ず自転車を降りて渡っているの、住民は感心しています。こうした今の気持ちを大人になっても忘れないでほしいと願っています。

環境担当教諭

高松 明子さん 本田 洋一郎さん



本田「一隅清掃では、教員は一切指導をすることはありません。自分と向き合う無言の取り組みは、生徒に気づきをもたらすと感じています。強風の後、落ち葉掃きを率先して行ったり、道ばたに落ちているごみを当然のように拾ったりする生徒も増えています」

高松「炎天下で農作業をしていた住民に、同校の生徒が『暑いのでどうぞ』と飲み物を差し出し、それに感激した住民が後日御礼を言いに来校されたというエピソードがあります。自分ができることを考えながら取り組む一隅清掃が、生徒の心を磨き、地域に目を向けるきっかけになれば嬉しいです」

在校生 3年

鶴見 隼哉さん 生徒会長 (写真右)
上野 夏実さん 美化委員長 (写真中央)
角井 洋紀さん 環境・福祉委員長 (写真左)



角井「国宝の比叡山延暦寺を清掃できただけでも誇らしく嬉しく思うとともに、そうした環境を整えてくれた歴史に感謝をしたいと思います。アルミ缶回収活動では、缶の数の集計が大変ですが、地域の方の協力が目に見える作業なので、楽しみながら取り組んでいます」

上野「美化委員会では、クリーン作戦をしながらごみの分別を行っているほか、一隅清掃終了後、きちんと取り組めたか全校生徒に振り返ってもらい、その結果を集計して放送で報告し、みんなの意識が高まる工夫をしています。今後はボランティアにも参加したいです」

鶴見「アルミ缶回収活動は、モチベーション向上のためにランキング付けして競い合いながら実施しています。回収率の数字だけではなく、生徒全員が協力して活動できるように工夫したいし、地域の方と一緒に校区内の清掃活動をしていきたいと考えています」

学校長 菊地 諭美さん



同校では環境委員や美化委員主導の活動の他に、一隅清掃、比叡山延暦寺でのクリーン活動など明確な目的を持って協働で美化活動に取り組んでいます。やらされているのではなく、見通しを持って計画的に行動できる生徒が育っています。



栃木県真岡市立中村中学校

住所：栃木県真岡市中203番地

電話：0285-82-2542

全校生徒数：327名

アクセス：JR石橋駅からクルマで約15分

埼玉県戸田市立笹目中学校



受賞時（2008年度）の活動概要

通学路を始め、校区内の公園や駅周辺、笹目川遊歩道沿いなど地域の清掃活動を2001年に開始した。当初は、生徒の健全育成や思いやりの心を育む狙いが込められていたが、年々規模が拡大。現在は住民も加わるボランティア活動として土曜日の午前中に実施、年間10回ほど取り組み、昨年の参加人数は延べ1135名に及ぶ。当日の司会から進行、諸準備など運営を担うのは生徒会。今年度は、近隣の小学校にも働きかけて合同クリーン活動を行った。ビンや缶・ペットボトルなどに分別した後のポリ袋は、一枚一枚手洗いし干してから再利用するなど、環境意識も向上。養われたボランティア精神は、花壇づくりにもつながり、地域からは「生徒が落ち着き学校もきれいになった」「生徒がよくあいさつをしてくれる」と高評価、地域全体にもいい影響を与えている。



受賞から11年後



2019年現在の活動状況

大人が捨てた道徳を生徒が拾い集め地域環境に貢献

1 活動の広がり

生徒指導の一環として開始した「地域クリーン活動」は、約20年経過した現在も、ボランティア活動として継続実施されている(①)。同校周辺の道路沿いや倉庫・工場街に散乱しているペットボトルや空き缶、たばこの吸い殻などの回収作業を生徒会が中心となって年5回行い、そのうち2回は近隣小学校や住民にも呼びかける地域の行事として定着(②)。校区内を細かく分けて班ごとに取り組む中で、住民と関わり、地域から認められることで、生徒自らの心の成長に深く寄与し、学校全体の雰囲気作りに一役買っている。一方で、保護者の協力を得て行う校舎周りの花壇の植栽は、地域に直接環境改善をもたらすなど、美化活動を通じて内外両面の相乗効果を生んでいる。

2 環境の変化

近年、地域に外国人が増加し、ルールやマナーの違いからポイ捨てごみ問題が深刻化している。生徒主体で進める清掃活動が追いつかないほどだが、ごみが放置された場所にごみが溜まっていく状況に目を向け、きれいにすればポイ捨てしなくなるという人の心理をついた作戦を打ち出した。地域とともにある学校の生徒としての自覚を持ち、自分たちを見守ってくれる住民に恩返しをしようと粘り強く美化活動に励んでいる(③)。

3 住民との関わり

開かれた学校づくりを掲げ、地域住民が講師となって体験学習講座を開催する、学校応援コーディネーター制度を2008年に導入。学校と家庭、地域の教育力を生かした、普段の授業では味わえない貴重な場となり、こうした連携がボランティア活動を支えている(④)。

4 これから

美化活動等を通じて地域交流を図る中、あいさつが飛び交う「あいさつがあふれる学校づくり」に共感した学校運営協議会委員から、「あいさつがあふれる地域」にしようという提案が寄せられた。ハード、ソフト両面で地域を創る土壌が整い始めた(⑤)。



環境美化活動に関わる人たちの声

2009年度卒業生 鮎ヶ瀬 友美さん

小学校教諭



当時、生徒会本部で地域清掃活動の運営を担っていたので、受賞を聞いたときは本当に嬉しかったです。豪華なホテルで大勢の人たちを前に行われた授賞式は、とても緊張しましたが、その場に立つことができた意味や、みんなといっしょに積み重ねてきたことを改めて考える貴重な機会にもなり感謝しています。

振り返れば、決められたエリアでポイ捨てごみを回収しながらゴールの学校を目指す清掃活動は、大変だった分、みんなで最後まで頑張ろうという団結力や根気が培われたように思います。いつか役に立つときがくるので、ぜひ誇りを持って活動を続けていってください。

地域住民 鮎ヶ瀬 尚美さん



受賞時に比べて清掃活動する生徒が減少しているように感じます。学校の話によれば、ボランティアに参加したいけれども、部活動を優先しなければならない生徒が少なくないそうです。たとえば、清掃活動がある日は、一斉に部ごとにボランティア参加し、終了後に活動を行うなど、臨機応変に取り組みれば参加者がぐんと増えると個人的には思います。

また、マナーやルールがわからない外国人には、生徒がいろんな言語で記したポスターを地域に掲示したり、清掃活動をアピールしたりするなど、中学生が積極的に情報発信していけばもっと広まっていくのではないかと期待しています。

生徒会担当教諭 小松 裕人さん

美化活動は街がきれいになるだけでなく、自分たちが住む地域に目を向けるきっかけにもなります。ポイ捨てごみを回収しながら、地域をもっとよくするためにはどうしたらいいかという社会参画の視点を持つことが、大人になる過程で、中学生の今がとても大事だと考えています。



在校生 3年 ^{どうきゆう} 道久 ^{まさる} 大さん

生徒会本部 書記



地域の清掃活動中に困っているのは、自動販売機の横にある回収箱が満杯であふれているから、その周囲にどんどんポイ捨てされてしまうことです。もっと回収箱の数が増えれば、ごみが散乱することはないと思うので、回収業者にはそうした対策をとってほしいです。

在校生 2年 高橋 ^{まな} 茉那さん

生徒会本部 会計監査



今までは生徒会が清掃活動の企画から運営までを担ってきましたが、人数の割に負担が多くて思うように呼びかけができませんでした。今後は美化緑化委員会にも担当を分担してもらい、私たち生徒会は補佐にまわりながら、もっと参加者が増えるように一丸となって取り組んでいきたいです。

学校長 ^{にへい} 二瓶 ^{まこと} 亮さん



人が捨てたごみを拾うのは嫌な気持ちになるかもしれませんが、生徒には「大人が捨てたごみ(道徳)を私たちが拾って自分の徳に変えよう」と呼びかけています。ごみをひとつ拾うごとに自分の徳が増え、しかも地域が美しくなるから、みんなで徳を拾いに行きましょうと喚起を促しています。



埼玉県戸田市立笹目中学校

住所：埼玉県戸田市笹目4-38-1

電話：048-421-1462

全校生徒数：600名

アクセス：北戸田駅から徒歩で約15分

兵庫県尼崎市立成良中学校



受賞時（2011年度）の活動概要

工業中心都市として発展を遂げてきた尼崎は、長きにわたり公害問題と対峙してきた。その解決に向けた住民や行政の熱心な取り組みに生徒が共感したのが契機となり、2004年から環境美化活動を開始。「尼崎シーブループロジェクト」と銘打ち、運河や海を舞台に産官学民連携で実施している。空き缶などのポイ捨てごみの回収はもとより、水中ヘドロの要因となる貝や藻類を回収してそれを堆肥にしたり、育てたワカメで海藻堆肥にしたりして、街の花壇や畑に利用。環境改善につながる取り組みを多角的に展開したことで、自分たちの生活に生かす循環型社会構造が誕生した。地域を流れる庄下川でも、その堆肥を使った緑化活動や清掃活動を行い、これらの成果は環境フォーラム等で発表、市内外に賛同の輪が広がっている。



受賞から8年後



2019年現在の活動状況

横のつながりで、人と自然が共生する運河復活目指す

1 活動の広がり

受賞から8年を経た現在、運河を拠点にした環境美化活動はさらに広がりを見せている（写真①）。年間約20回にわたり、同校の中学生や卒業生らが集まり、「ネイチャークラブ」として運河の水質浄化（写真②）、環境改善に向けた取り組みに注力。参加人数が徐々に増え、認知度もアップしている。地域との連携も深まり、生徒はきれいになった運河の魅力を発信しようと、「チャネルガイド養成講座」に参加（写真③）。ガイド資格を取得する生徒も出始めた。国際会議では自分たちの取り組みを英語でスピーチするなど、環境美化を入りに、命のつながりを実感しながら豊かな心を育み、知識が着実に身につく深い学びへと発展。

2 環境の変化

鳥の巣箱と運河。このふたつが美化活動を促す重要な環境バロメーターだ。野鳥が営巣した巣材は以前、プラスチックごみが多く使用されていたが、美化活動開始後は、枯れ草などの自然素材が使われるようになり、孵化率が大幅に向上している。運河や川沿いでは、ポイ捨てごみを積極的に回収したり、運河の水質浄化システムを設置したりするなど、水辺の環境づくりに取り組んだ結果、人と自然が共生する場所に生まれ変わってきた（写真④）。

3 住民との関わり

開始当初から進めてきた徳島大学や尼崎小田高等学校との連携は、代々の卒業生が加わることでさらに絆が深まっている（写真⑤）。県や市などの自治体、数10社に及ぶ企業からの協力も得られるなど、学校以外の横のつながりが構築された。現在は、口コミで他の中学校や小学校からの参加者も増えている。

4 これから

産官学民連携で取り組む環境改善活動は、着々と実を結んでいる。運河に続き今度は、尼崎市下水処理施設内において人工干潟をつくり、アサリを育てながら多様な生き物と共生し合えるまちづくり事業を行う予定。理想の環境で真の持続可能な社会を丸ごとになって取り組む決意だ。



環境美化活動に関わる人たちの声

2011年度卒業生 山本 仁湖さん

兵庫県立大学 経済学部 3年

現在フィレンツェに留学中。語学を学びながら、イタリアの環境・野生動物保護団体「LIPU」のインターンシップに参加。主に、水辺の環境保護活動や環境教育活動に携わっている。

部活で尼崎市内の運河を訪れた時、運河の水深のうち半分を占めているヘドロを初めて見ました。想像以上に真っ黒で異臭を放つヘドロは本当に衝撃的なもので、あれを見て驚かない中学生はいないだろうな、と今でも思います(笑)。運河がいかに汚れているかを実感するのにヘドロは効果てき面で、“なんとかしないと”と活動初回にして感じたことが強く印象に残っています。

私はもともと友達付き合いが得意でなく、人とのコミュニケーションに苦手意識を持っていました。中学生になってもその性格は変わることなく、おとなしく学校生活を過ごしていました。

部活で環境活動に関わるようになったある日のこと、部活顧問だった先生にふと「学校でもそんな風にしてたらいいのに」と言われました。「そんな風？」と自分自身を振り返った時、環境活動をしている時は、周りを意識し過ぎずに、ありのままの自分でいられたことにハッと気づきました。あの瞬間は今でもはっきりと覚えています。そして、その言葉がきっかけで、私は自分に少し自信を持ち、人とつながることがだんだん好きになっていきました。

自然環境に触れる時、人はありのままの自分に気づき、最も自然な状態でいられると思います。環境活動は、環境のことを考えさせられるだけでなく、そうした本質的な人の在り方を知り、自己肯定感をも得ることのできる価値のある活動だと実感しています。

私は成良中学校の尼崎運河の活動を通して、水辺のまちづくりに興味を持ちました。今、留学しているフィレンツェを州都とするトスカナ州にはアルノ川という大きな川が流れています。過去に氾濫による災害被害から何度も復興した歴史を有する地域ですが、フィレンツェがその水辺をいかに活用、共存しているかを自分の目で確かめ学びたいと思ったのが留学の動機です。



イベントの準備。会場整備しているところ



カヌーで湖を周りながら調査している様子

私の将来の夢は、子ども達に自分が育った街がここでよかった、と自分の街に誇りを持てるようなまちづくりをすることです。

中学からの環境活動を通して、私は“本当に価値のあることは何なのか”を考えるようになりました。それは、お金を使って贅沢をすることではなく、「人と出会って交流すること」、「その土地でとれる新鮮な食べ物をいただくこと」、「地域の文化遺産を観ること・体験すること」だと思っております。そして価値のあるものに気づくことができた時、人は「幸せだ」と感じるのではないのでしょうか。

私は、今とても幸せです。それは、イタリア留学で様々な人と出会い、文化の違いを知り、街ならではの郷土料理を味わうことができているからです。

現在さまざまなものが発展した社会の中で、日本を含め多くの都市は均一化し、自然は減少し、若者が自然にアクセスする回数は減り、私たちの視野はどんどん狭くなっていると感じます。子ども達には、自然に触れる機会を増やし、自分たちの街の良さを見つけ守っていく大切さや、そこでしか得られないものを感じる喜びを味わって欲しいです。

それが、持続可能なまちづくりの一步でもあると思います。そしてこのまちづくりを通して、私の感じた価値のあることを、本当の幸せを、次の世代の子ども達に伝えていくことができればと思っています。

母校での環境活動すべてが、私の考え方、生き方を変えてくれました。

あの活動、先生からの一言がなければ、今の私はいなかったと思います。



静かな森の中で小屋づくり



子どものためのフェスタ “Merenda d’ autunno”



自然体験をしながら野鳥保護の大切さを学ぶ子ども



浴衣姿でフェスタを盛り上げた山本さん

地域団体 中岡 禎雄さん

ネイチャークラブ代表
元成良中学校教諭



自分たちの行っている環境活動が、いろんな人にいろんな場所で認められて、生徒たちは自信を深めています。そして、大学生や高校生、企業の人たちと連携しながら取り組むことで横のつながりができて、人とつながる大切さを学ぶことができました。いいことをしていたら必ずいい人に出会えるし、「ありがとう」という感謝の言葉で締めくくられる活動は、やっていて心地良く楽しくて、それが持続につながることを痛感しています。

一方で、この取り組みをしたからといってポイ捨てごみがすぐに減少するわけではありません。が、生徒がなんとかしたいという気持ちが芽生えることこそが大事だと考えています。長らく私たちの生活を支えてきた運河に最高の恩返しができるように、これからも横のつながりを生かして取り組んでいきます。



在校生 3年

新井 侑大さん 森 椽頭人さん
氏本 凜さん (写真左より)



新井

「自分が住む街に運河があることを、ネイチャークラブに入部して初めて知りました。現在の運河は魚や野鳥の姿が見られ、環境がだんだん改善されていくのがうれしいです。この取り組みは、地域のためにやっている活動ですが、実は自分自信にとっても役立っていることだと感じています」

森

「ネイチャークラブの活動を通じて、植物栽培の大変さを身をもって知りましたが、やりがいがあることもわかり、今後は実際に植物の研究をしてみたいです。また、環境活動では多くの人に伝えないと変わっていかないことも学んだので、これから広く発信していきたいです」

氏本

「大学生や高校生などいろんな人たちと関わり、意見交換することでコミュニケーション力が高まり、大きな会場でも自分の意見を堂々と発言出来るようになりました。後輩には、知らないことを自分で見つけていく楽しさをいっぱい体験してほしいです」

連携大学 宮内 尚輝さん

徳島大学 大学院修士1年



大学生は研究に従事することで知識や能力が身につくといいますが、中学生といっしょに活動することで、いっそう学びが深まっています。たとえば、難しい言葉や仕組みを中学生に理解してもらうには、かみ砕いた説明が必要ですが、これは物事を理解していないとできません。彼らとの協働作業は自分自身にもいい刺激をもたらしてくれるので、とてもやりがいがあります。

連携高校 秋山 衛さん

尼崎小田高等学校 教諭



文科省指定スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究推進校として、尼崎の運河や大阪湾についてさまざまな研究をしています。最初は、それぞれの学校がバラバラに活動していましたが、市が立ち上げた尼崎運河再生プロジェクトにより、産官学民が連携することで幅広い研究活動が可能になりました。高校生にとっても大きなメリットを実感しています。

学校長 鎌田 ^{もとき}基さん



当初は生徒指導の側面から環境教育活動を始めましたが、つながる命の循環を学ぶことで生徒の心が育まれ、落ち着いた環境で学校生活が送れるようになりました。現在は、学校単体では活動することが難しく、地域の方々の支援を受けて続けている状況ですが、ネイチャークラブの生徒が活動の成果をさまざまな場所で発表し、学校全体に好影響を与えています。



兵庫県尼崎市立成良中学校

住所：兵庫県尼崎市西長洲町2-33-22

電話：06-6482-3081

全校生徒数：457名

アクセス：阪神尼崎駅より徒歩約5分

おわりに

環境美化教育最優秀賞校のみなさんが、異口同音におっしゃる言葉があります。

「当たり前のことを続けてきて、振り返ると数十年経っていた」

時代の流れとともに社会環境や教育現場が変化する今、少子化の波による学校の統廃合、グローバル化に対応した教育改革などへの対応が迫られています。しかし、ここに掲載された5校は、変わりゆく情勢に苦戦しながらも、自分たちの住む地域をきれいにしたいという気持ちは決して揺らぐことなく、長きにわたり美化活動に励んでこられました。

現在、「海洋プラスチックごみ（海ごみ）」が重大な汚染問題として世界で関心を集めていますが、この「海ごみ」という言葉が飛び交うずっと前から地域の海や砂浜、そこに通じる川、山の自然を守りたいとの一心で、ポイ捨てごみを代々回収し続けてきた、それが受賞者たちの姿です。

いっぽうで、少子化の影響は避けることができず、受賞当時の生徒・児童数に比べて、半減した学校が目立つ現実にも目を向ける必要があります。現に「限られた人数の中で、学校がさまざまな対外活動を行うのには限界がある」と複数の環境担当教諭が指摘しています。

そのような学校の深刻な実情を受けて、影となり日向となり積極的に後押ししているのが地域住民です。生徒・児童が主体的に行う環境活動を、住民たちが時に見守り、時にアドバイザーとなる協力を惜しまない体制が整っているのも、最優秀校の大きな特徴です。

「大好きな自分たちの町が汚れるのはイヤだから、ポイ捨てごみを拾う」

こうした生徒・児童の思いや自発的な行動は、住民に感謝されて地域の一員として認められるという連帯感、住民が子どもたちのことをちゃんと見ていてくれるという安心感から芽生えるように思います。最優秀校では「自尊心が高い子どもたちが多い」という話をよく耳にしますが、環境美化活動を通じた住民との交流で、その素地が培われていると分析する教諭も少なくありません。そうしたベースがしっかりしているからこそ、子どもたちは学びをどんどん外に広げることができるといいます。これは、地域での環境美化活動を契機に、もっと視野を広げるべく海外に渡った、兵庫県尼崎市立成良中学校の卒業生が何よりもの好例ではないでしょうか。

今後も当協会では、地域の環境美化に貢献されている優れた活動にスポットを当てながら、引き続き環境美化の啓発・推進に努めて参ります。

最後になりますが、今回の取材に際し、お忙しい中でも喜んで時間を作ってくださいました最優秀賞受賞の関係者のみなさんに心から感謝申し上げます。